

# 「スピリチュアルケア論」学習者の医学系学生への啓発 —スピリチュアルニーズの理解を深めて—

清 水 裕 子  
吉 本 さやか  
上 原 星 奈

- I はじめに
- II ねらい
- III 実施方法
- IV 結果と考察
- V まとめ
- VI 引用文献

## I はじめに

医学、看護、臨床心理学といわず、対人援助職の活動においては、クライアントや患者の内的苦痛に触れることがあり、またそれを改善できなくとも、心情を理解し、心理的安全を確保するための支援が求められる。人は動物と区別され、霊的存在といわれるように、人としての尊厳を尊重される必要があり、そのために苦痛緩和が援助職に期待される。日本では、人のもつ霊性はスピリチュアリティと英語のまま、表現されており、Spiritは、精神、魂、精霊、霊魂、気迫、気力と日本語訳されている。Spiritの多義性について、筆者ら(2021)は、認知意味論的分析を行ったところ、“spirit”の意味は多様に派生しているため、「霊性」とは異なる意味があった。したがって、日本の看護分野で用いられているカタカナのスピリチュアリティ、あるいはスピリチュアルは、英語の“spirit”の意味を理解することにより、英語圏諸国の人々が理解するスピリチュアルケアを共通理解できるものと考えられた。世界保健機構のSpiritualの説明では、人間として生きることに関連した経験的一側面であり、身体感覚的な現象を超越して得た体験を表す言葉であるとされている。同機構による1983年の「がんの緩和ケアに関する専門委員会報告」では、多くの人々にとって、「生きていること」が持つスピリチュアルな側面には宗教的な因子が含まれているが、「スピリチュアル」は「宗教的」とは同じ意味ではないことが明言されており、スピリチュアルな因子は、身体的、心理的、社会的因子を包含した、人間の「生」の全体像を構成する一因子とみることができ、生きている意味や目的についての関心や懸念と関わっている場合が多いと述べられている。

そこで、香川大学医学部では、スピリチュアルケアの理論的理解が、看護師に必要な能力と考え、平成24年カリキュラムにおいて、看護学科4年生の自由科目として新設された。平成24年度カリキュラム改革では、臨床実践力を高める科目として医療技術のスキルアップの科目を開設したため、対応する内面の成長を促す科目として「スピリチュアルケア論」を位置づけた。

スピリチュアルケア論の授業の概要は、看護者が実践上の課題とする看取りについて焦点をあて、日常

生活上の苦悩や病の問題から、患者のスピリチュアリティを明確にする体験を共有し、人とのかかわりから得られるケアの本質的な要素として「存在」を取り上げ、具体的な看護方法を教授する。授業の目的は、看護者が日々の生活や看護活動の中で体験する命の営みを科学的に問い直し、「生」と「死」にどのように向かうかを考えることと、「人間の尊厳」について理解を深めて、霊的な次元で苦悩する人間へのケアリングとスピリチュアルケアの方法を習得することを目的とした。そのうえで、到達目標は、1；看護者が行う死の看取りにおける実践上の課題を述べることができる、2；患者の日常生活上の苦悩や病の問題から、スピリチュアルペインを説明できる、3；看護場面における看護者の「存在」の意味を説明できる、4；死の臨床の「癒し」における看護師の役割と適用可能なスピリチュアルケアの技術を説明できる、5；死までの時間にいる人間の存在と苦悩および生のあり方について記述できるとした。また、看取りについての具体的な臨床事例を紹介し、ケアの具体的な方法論を提示し、癒しにおける看護師の役割について討論する。さらに、苦悩する人間の存在について、ハイデガーの理論を準用し、死までの時間を如何に生きるべきかについて洞察を促すこととした。

授業の構成は、次の通りとした。第1回；スピリチュアルケアの基本概念、第2回；病をもつ人の心の危機的状態とスピリチュアリティ、第3－4回；ドイツのスピリチュアルケア、第5回；学部3年生の臨地実習事例の患者情報と看護実施の記録をもとに、学生自身が看護活動を振り返ることとした。振り返りでは、学生自身の実存的な苦悩や患者の苦悩の理解に関する課題を抽出し、それをスピリチュアルケア看護過程として、再構成する内容とした。第6回；臨地実習事例の振り返りとスピリチュアルケア看護過程、第7回；医療専門職のスピリチュアルケアコンピテンシー、第8回；看護と人間の尊厳および学習のまとめとした。

上原ら（2023）は、看護学生が患者に行ったスピリチュアルケアの実施に至る過程の説明において、患者の苦しみを焦点化させる分岐点では、看護学生は、患者の苦悩を焦点化し、それを記述したことによって、スピリチュアルケアとなりうる行動を明確にしたと考えられると述べており、学部学生においてもスピリチュアルケアの学習が可能であることを示した。また、看護学心理学分野の学術集会において、教育的アプローチについて、本授業を紹介し、討論を行ったところ、対人援助職が例え無力であっても、ありのまま患者に接することで患者が癒されることや、心理職は手足が出せないけれども、できないなりにありのままの姿で受け止めることがスピリチュアルケアの第一歩であるという見解などが述べられた（清水ら、2020）。しかし、未だ、スピリチュアルケアはわが国では導入期にあることも共通理解された。

## II ねらい

そこで、香川大学のスピリチュアルケア論を学習した学生が、スピリチュアルケア未習の医学系学生に、学習成果を普及させたいと取り組みを行った。特に、学生生活で経験可能な、対人関係から生じる心の安寧に関する心的過程や自らの無力さを感じる場面で超越的な存在に依拠しようとする心的過程を含む、スピリチュアルニーズを取り上げた。スピリチュアルニーズは哲学的な概念であるものの、Büssingら（2018）は、Spiritual Needs Questionnaire（以下SpNQ）を開発し、4つの下位尺度と構成要素を抽出している。それらを学んだ学生が、学生同士の学習成果を共有するという実践を行った。以下の通り、分析を踏まえて報告する。

## III 実施方法

スピリチュアルケア論学習者の医学系学生への啓発演習の実施方法は次の通りであった。

## 1. 実施手順

スピリチュアルケア論学習者の医学系学生への啓発演習は、2023年9月30日にSCOME主催で開催された対面イベントにて1時間のLLPセッションで行われた。セッションのはじめに、スピリチュアルケア論学習者から、スピリチュアルの概念の説明やスピリチュアルペインとニーズについて、精神的苦痛とスピリチュアルペインの違いなどについて発表スライドを用いて説明した。次に、SpNQを用いて参加者自身が抱えるスピリチュアルニーズをSpNQ4因子の視点から測定した。その後、1グループ3～5人に分かれてグループワークを行った。グループワークは、ワークシートを用いて、4因子別の質問項目における日常の具体的な場面を考えた。グループは、5グループ生まれ、学年や年齢を問わずランダムに配置された。各グループにはファシリテーターを1人配置し、ファシリテーターには事前に質問項目の意味などニュアンスを伝え、グループのディスカッションがスムーズに進行するように説明した。

ディスカッションの時間が25分であったため、開始前に2点の内容を説明した。1点目は、グループ1とグループ5には「第1因子宗教的ニーズ」から、グループ2は「第2因子実存的ニーズ」から、グループ3には「第3因子内的平和ニーズ」から、グループ4には「第4因子継承ニーズ」から検討するように説明した。2点目は、具体例が思い浮かばない場合は、次の質問に進むように説明した。

## 2. 終了後の感想の項目

セッション終了後には、参加学生に対して、以下6つの内容の感想を記入することを求めた。

- (1) 本セッションの満足度を教えてください。
- (2) スピリチュアルニーズ(スピリチュアルニードと同義、以下同様)への考え方の変化はありましたか。
- (3) スピリチュアルニーズについて理解できましたか。
- (4) よかった点を教えてください(スピリチュアルニーズへの考え方がどう変わったかも教えてください)。
- (5) 改善点を教えてください。
- (6) セッションを通しての感想を自由にご記入ください。

## 3. 分析方法

SpNQ4因子別質問項目に関連する日常の具体的な場面の記述内容は、質的データ分析支援ソフトNVivo (QSR International, America) により記述されたテキストの頻出単語と感情コーディングの比率を検討した。また研修参加の感想は択一式の回答を求め記述的に検討した。

終了後の感想の項目(1)～(3)への回答は、4件法での回答を求め、記述的に分析した。自由記述は内容を検討した。

## IV 結果と考察

SpNQの4因子別質問項目に関連する日常の具体的な場面の内容と研修参加の感想は次の通りであった。頻出単語と各因子の文章がどのような感情を伴っているのか機械的に検討した結果と照合して因子ごとに検討した。

### 1. 各因子に関する頻出単語

宗教的ニーズの具体例を記した文章は、35文であった。35文の中で用いられた頻出単語は、「-」が4回、「自分」が4回、「ほしい」、「人生」、「受験」、「家族」、「祈る」、「本」が3回ずつであった(図1)。

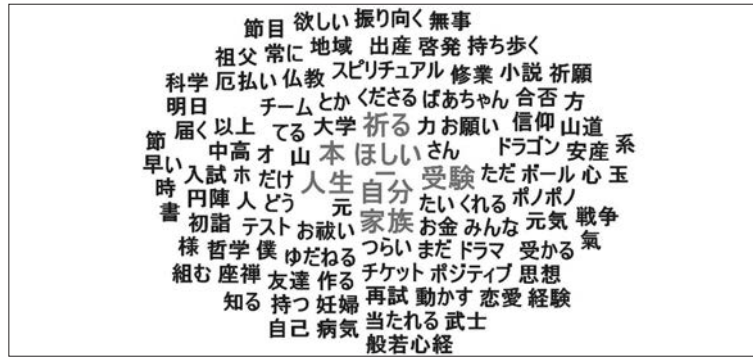


図1 宗教的ニーズ因子の頻出単語

4 因子の頻出単語を検討した結果、20代前半、大学生という年齢や役割に関する単語であった。「宗教的ニーズ」では、「ほしい」、「人生」、「受験」、「家族」、「祈る」、「本」という受験に関連した単語であったと考えられる。日本では、「太宰府天満宮をはじめとする全国天満宮は、1,100年以上に亘り、天神さまは学問の神様、文化芸術の神様、厄除けの神様などと広く崇敬され、人々の心のよりどころとしていまもなお信仰され続けている。特に平安時代の貴族である菅原道真公は、自分のための勉強を社会のための学問へと発展させた功績から、学問の神様として称えられている（太宰府天満宮HP）」大学受験は、大学生にとって、人生の岐路になりえる出来事である。ゆえに、心のよりどころとして、家族の祈りのみならず、学問の神様に祈り願う心的過程が影響したものと考えられる。

感情の側面では、宗教的ニーズは、25文がニュートラルな感情、10文が否定的感情に分類された。否定的感情に分類されたのは、【ポジティブな本を常に持ち歩いている】や【大学で友達を作るために読んでいた】、【ただスピリチュアルについて知りたい】、【人生に追い込まれたとき（自分の力ではどうにもならないとき）】などであった。

以上から、宗教的ニーズは受験の経験から理解されており、超越的な存在にすがりたいときには対処が可能であると推察される。

実存的ニーズの具体例を記した文章は、2文と少なかった。2文の中で用いられた頻出単語は「友達」の2回であった（図2）。

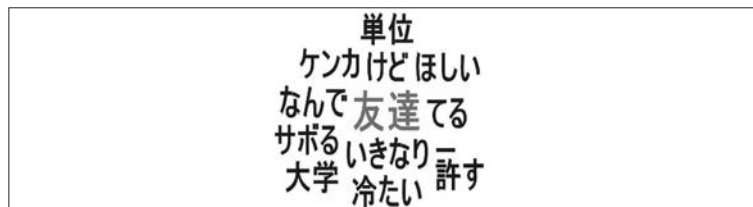


図2 実存的ニーズ因子の頻出単語

青年期における友人関係は、心理的な安定化、社会的スキルの学習、自分がそうありたいと思うモデルの機能など様々な機能を果たしているといわれている（松井, 1990）。つまり、大学生活で築く友人関係は、楽しみや喜び、悲しみ、苦労を共有する仲間である。一方で、友人関係の亀裂や希薄によって、大学生活の充足は満たされなくなり、何のために大学に進学したのかという自己存在に関するニーズになりえ



ると考えられる。感情の側面では、実存的ニーズ因子は、2文ともニュートラルな感情に分類された。今回の結果からは、公の場で自らの友人関係に関連する葛藤や内的苦痛を表現することはできなかったのかもしれない。あるいは、医学系の学生が実存的な内的過程の理解や哲学的な思索の言語化に不慣れである可能性が考えられる。

内的平和ニーズの具体例を記した文章は、11文であった。11文の中で用いられた頻出単語は、「たい」、「自分」、「くれる」、「すぎる」、「考える」、「言う」が2回ずつであった（図3）。

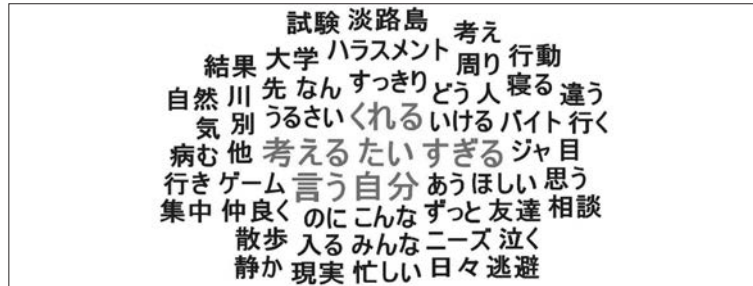


図3 内的平和ニーズ因子の頻出単語

「内的平和ニーズ」は、「自分」という単語が頻繁に使用された。この因子は、自分自身の心の安寧に関するニーズであるため、自分という単語が使用されたと考えられる。感情の側面では、内的平和ニーズの文章は、11文がニュートラルな感情、5文が否定的感情に分類された。否定的感情に分類されたのは、【自分の行動について気になる→ずっといる友達は言ってくれる（大学に入ると言ってくれない）】、【バイト先でのハラスメント（なんで自分がこんな目にあわなきゃいけないんだ）】、【試験結果】、【相談しない。泣いてすっきり、別のことを考える、考えすぎて病む】、【自分の考えが他の人と違ったらどうしよう】であった。具体的な生活場面のうち、対人関係や能力評価に関連することで否定的な感情になり、あるいは一人で悩みを抱え込んでしまうという状況から、内的平和が乱されている状況がうかがわれた。

「継承ニーズ」の具体例を記した文章は、10文であった。10文の中で用いられた頻出単語は、「自分」が3回であり、次いで「不安」、「人生」、「思う」、「慰める」、「経験」、「言う」は2回ずつであった（図4）。

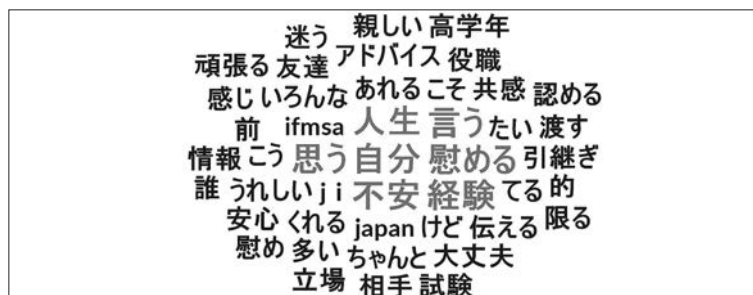


図4 継承ニーズ因子の頻出単語

「継承ニーズ」でも、「自分」という単語が頻繁に使用された。この内的平和ニーズと継承ニーズの2つの因子は、自分自身の心の安寧や人生経験の伝承に関するニーズであるため、自分という単語が使用され

たと考えられる。感情の側面では、継承ニーズの文章は7文がニュートラルな感情、3文は肯定的感情に分類された。肯定的感情に分類されたのは、【共感してくれると認められた感じがする】、【頑張っているよと言われたらうれしい】、【不安なとき（試験前）に大丈夫と言われたら安心する】であった。以上から、年長者や経験者から認められることで肯定的感情が高まると考えられる。

## 2. 4因子の感情の相対的比較

図5は、記述された文章を肯定的、否定的、ニュートラルの3群に分類した結果を、4つの因子のそれぞれにおいて比率を示した。

医学系学生のスピリチュアルニーズを考えた際の感情について、4因子ともニュートラルな感情を表す文章が多くみられており、否定的な感情を表す文章や肯定的な感情を表す文章もあった。Tylor, E. J. (2002) は、スピリチュアルニーズは、悲惨な経験の結果起こることがある。しかし、生理的・感情的なストレス体験の全てが否定的経験とは限らない。肯定的な出来事に対する反応である快ストレスも、スピリチュアルニーズのきっかけになると述べた。つまり、医学系学生のスピリチュアルニーズの生じた場面は、様々な否定的・肯定的経験であったため、ニュートラルな感情以外に否定的、肯定的感情もみられたと考えられる。

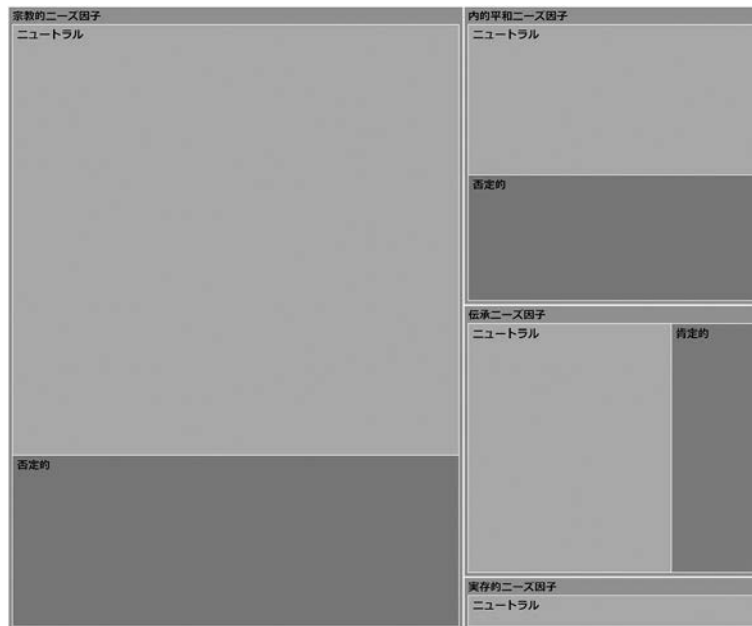


図5 感情の比較

## 3. 医学系学生へのスピリチュアルケア論の啓発の感想

全回答の中からスピリチュアルニーズに関する感想を抜粋した。

医学系学生19名に対して、スピリチュアルケア論の啓発の満足度を「4：大変満足できた」から「1：満足しなかった」の4段階評価で回答を得た。満足度の結果は、「4：大変満足できた」が17名（89.5%）、「3：満足」は2名（10.5%）であった（図6）。

次に、「スピリチュアルニーズへの考え方の変化はありましたか」の設問に対して、「4：大きな変化があった」から「1：変化がなかった」の4段階評価で回答を得た。その結果、「4：大きな変化があった」

は14名 (73.7%)、「3：変化があった」は5名 (26.3%) であった (図7)。

さらに、「スピリチュアルニーズに関して理解できましたか」の設問に対して、「4：大変理解できた」から「1：全く理解できなかった」の4段階評価で回答を得た。スピリチュアルニーズの理解度の結果は、「4：大変理解できた」は8名 (42.1%) であり、「3：まあまあ理解できた」は9名 (47.4%)、「2：あまり理解できなかった」は2名 (10.5%) であった (図8)。

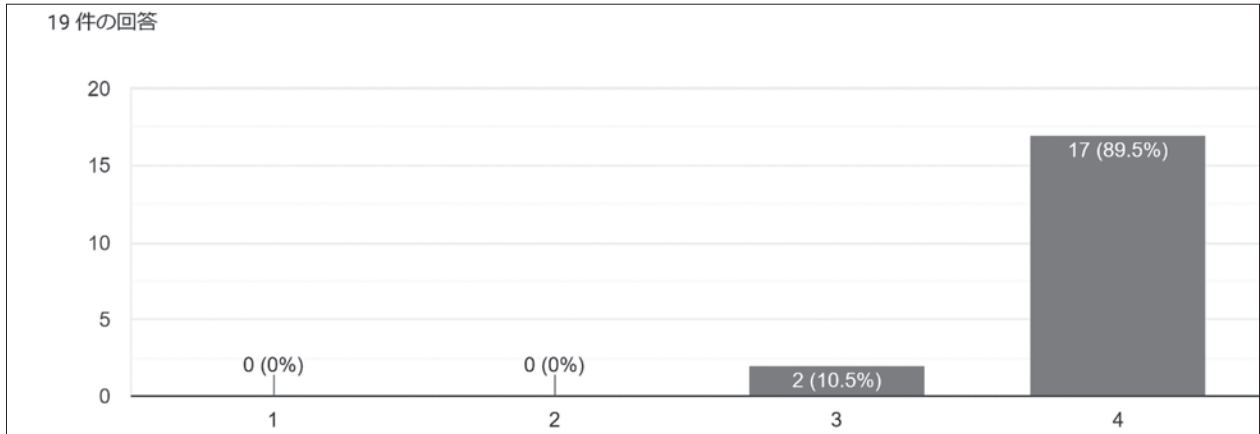


図6 医学系学生の満足度 (n=19)

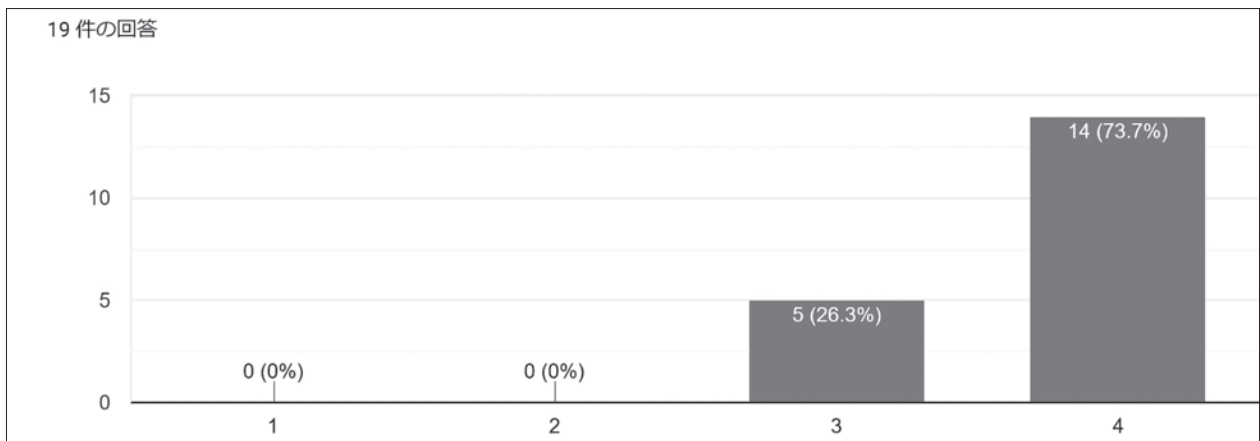


図7 医学系学生の変化 (n=19)

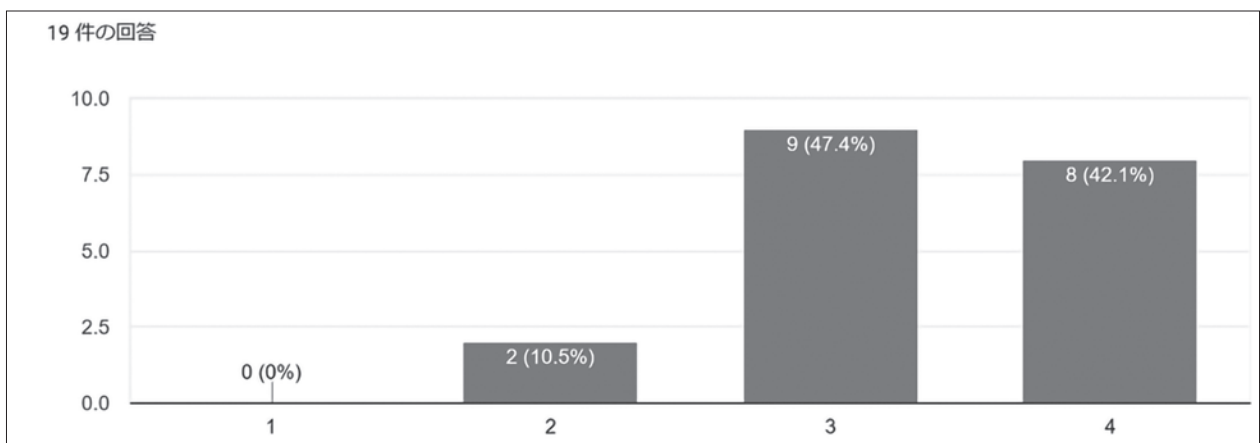


図8 医学系学生の理解度 (n=19)

自由記述による感想を表1に記した。具体的には、「スピリチュアルと言われると、高齢者や末期癌患者のイメージが強かったが、自分たち学生や妊婦など、若い人にも関わるものであるという認識をもつことができた。」や「スピリチュアルニーズについてざっくりと精神的欲求だと思っていたが、医療や日常生活と切っても切り離せない、万人に共通する概念で大切な理解だと思った。」など日常生活にある自身のスピリチュアルニーズの気づきについて記述がみられた。さらに、「最初はなんとなく曖昧な感じだったが、具体例を考えるにつれて自分に対しても将来出会う患者さんに対しても大切にしていきたいと思った。」や「スピリチュアルニーズを踏まえて診療するとまた違ってきそうだと思った。」など今後の医療に活かしたいという感想もみられた。一方、スピリチュアルニーズの内容が難しかったという感想もあった(表1)。

スピリチュアルニーズとは、関係性、内的平和、人生の意味・目的、自己や他者を超えた次元に関連した欲求 (Büssing, A., Balzat, H., et.al. 2018) と定義されている。健康な状態では顕在されないニーズであるが、本セッションに参加した医学系学生は、過去の体験から自らのスピリチュアルニーズを自覚することによって、患者やその家族のスピリチュアルニーズへの理解の一助になったと考えられる。

医学系学生の感想から、本研修に概ね満足はしているものの、スピリチュアリティやスピリチュアルニーズに対して難しい事柄であると考えていたことが明らかになった。また、実存的ニーズに関しては、

表1 医学系学生の感想一覧

日常生活にある自身のスピリチュアルニーズへの気づき	<p>自分のこの考え方がスピリチュアルなものに由来することなどを理解することができた。「祈る」の意味を宗教的なことだけだと思っていたけど、普段から何気なく人と一緒に願っていたりすることも入るんだと思ってびっくりした。</p> <p>全然考えたことの無いことだったが、とても身近な所に隠れていたのがおもしろかった。</p> <p>スピリチュアルと言われると、高齢者や末期癌患者のイメージが強かったが、自分たち学生や妊婦など、若い人にも関わるものであるという認識をもつことができた。</p> <p>楽しかった。</p> <p>難しい内容かなと思っていたけど、身近で自分にも関係あることだと思った。</p> <p>そもそも、スピリチュアルってなんか怪しいと思っていたが、すごく日常に溢れており、医療でも大切なことだと知ることができた。</p> <p>スピリチュアルニーズについてざっくりと精神的欲求だと思っていたが、医療や日常生活と切っても切り離せない、万人に共通する概念で大切な理解だとも思った。</p> <p>祈るという言葉が噛み砕いて解釈することで、無宗教の自分でも身近に感じられるようになった。</p> <p>スピリチュアルニーズは壮大なものだと思っていたが、案外自分も抱えていることを知った。</p> <p>スピリチュアルニーズは怪しくない。</p> <p>スピリチュアルは怪しいものではないということがわかった。</p>
今後の医療に活かしたい	<p>スピリチュアルニーズを踏まえて診療するとまた違ってきそうだと思った。</p> <p>最初はなんとなく曖昧な感じだったが、具体例を考えるにつれて自分に対しても将来出会う患者さんに対しても大切にしていきたいと思った。</p> <p>特に患者さんは何かに縋りたいとか、逆に自分の運命を受け入れてるとか、色んな心身のフェーズがあると思う。今後患者さんと対話する時に難しいことも感じることもあるけれど、今回考えた因子のどこかに該当するのではないかも考えながら患者さんの気持ちを掴み取れたら良いと思った。</p> <p>妊婦さんの視点や、世界中の人に祈ってもらいたいなど、自分には無い視点を得られた。</p>
内容の難易度について	<p>スピリチュアルニーズを感じる際の具体的なイメージをもちにくかった。</p> <p>具体例が出てこないことが多かった。</p> <p>テストで努力が足りなかった自分を許して…奇跡が起きて受かってくれ…はスピリチュアルニーズじゃないのか。</p> <p>内容が難しかった。</p> <p>少し難しかったが楽しかった。</p> <p>質問は難しかったが、話し合いをすると視点が変わりおもしろかった。</p> <p>自分の気付いてないペインについて考えることの大切さを学んだ。</p> <p>他の人のスピリチュアルや宗教に関する考え方に触れることができ勉強になった。</p> <p>スピリチュアルのケアの本を読んでみようと思った。</p> <p>みんな違ったニーズが日常生活に持っていることが分かった。</p>



具体例がほとんど記述されなかったことも特徴的であった。スピリチュアルニーズは、人間が誰しも多かれ少なかれ持っているものである。元気で、忙しい毎日には、特に表に出てこないニーズであるが、病んでいるときに現れてくることが多い (Kippes, W., 1999) と考えられている。つまり、医学系学生は、これまでの人生経験において、危機的な状況や絶望を感じるほどの苦しみの体験がほとんどないかあるいは言語化に不慣れであったため、潜在的なニーズを認識する機会は少なかったと考えられる。将来的に医療職に携わる医学系学生は、適切なタイミングで適切にケアを行うために、患者やその家族が抱くニーズを理解する必要がある。医療において、患者のニーズは、医療者の経験から想定されることよりも、複雑で多様であろうと推察される。今回のスピリチュアルケア学習者の医学系学生への啓発により、医学系学生のスピリチュアル次元における準備性について、基礎的な知見をえることができた。

## V まとめ

医学系学生のスピリチュアルニーズは、発達課題や社会的役割の影響を受けることが示唆された。医療系学生は、将来、医療従事者として世代も社会的役割も異なる患者やその家族へのサービス提供を求められる。患者や家族のスピリチュアルニーズを理解するためには、予め対象の発達課題や役割を把握するとともにスピリチュアルな次元の内的過程の言語化に触れる必要があると考えられる。

## VI 引用文献

- 全国天満宮総本宮大宰府天満宮：学問の神様. <https://www.dazaifutenmangu.or.jp/> (参照日2023年10月24日)
- Taylor, E. J. (2002) / 江本愛子 江本新 (監訳) (2008) : スピリチュアルケア 看護のための理論・研究・実践, 医学書院, 東京.
- Büssing, A., Recchia, D. R., Koenig, H., et al. (2018) : Factor Structure of the Spiritual Needs Questionnaire (SpNQ) in Persons with Chronic Diseases, Elderly and Healthy Individuals, *Religions*, 9 (13), 1-11. doi: <https://dx.doi.org/10.3390/rel9010013> (参照2018年12月21日)
- 松井豊 (1990). 友人関係の機能. 斎藤耕二・菊池章夫 (編著). 社会化の心理学ハンドブック：人間形成と社会と文化. Pp. 283-296. 川島書店, 東京
- Kippes, W. (1999), スピリチュアルケア 病む人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア, サンパウロ, 東京.
- 上原星奈, 清水裕子, 小島優子 (2023) : 複線径路・等至性モデル (TEM) を用いた看護学生のスピリチュアルケア過程の検討. 香川大学看護学雑誌. 27 (1). 13-24.
- 上原星奈, 清水裕子 (2021) : 英語の多義語 “spirit” の認知意味論的分析. 香川大学看護学雑誌. 25 (1). 23-32.
- 清水裕子, 木村登紀子, 中込さと子, 遠藤公久 (2020) : 国立大学医学部看護学科での霊的ケアの教育：霊的存在へのケアコミュニケーション-ヒューマン・ケアとスピリチュアルケア. ヒューマン・ケア研究. 20 (2), 101-126.
- 世界保健機関編 (1990) / 武田文訳 (1993) : がんの痛みからの解放とバリエティブ・ケア (第2版), 金原出版, 東京.